
残り香

一宮みや

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

残り香

【Zコード】

Z4954D

【作者名】

一富みや

【あらすじ】

毎朝の退屈で窮屈な通勤電車の中で、ふと気付いた良い香り。香りの元にいたのは、の人。それから毎朝の通勤ラッシュが楽しみになる。あの人の事は何も知らないけど、それでも、あの人の香りは仄かに甘い優しい香りだから・・・。香水好きな男女の物語です。どうぞお楽しみ下さい。

パート1：彼

「さてと、今日はどれにしようかな」

鏡の前で、すっかり身支度を整えてしまつと、あたしは窓の外を見た。

空は薄曇りだし、ちょっと湿気もありそう。『今飯食べてる時に天気予報が何か言つてた

けど、忘れちゃつた。けど、この分じゃ夜には雨が降るかもね。

てことは……、

「うーん。今日は、これだ」

棚に並んだ香水達の中から、ジャンヌ・アルテスのサンタフュの

瓶を取り上げる。アト

マイザーに移し替えた奴が残り少ないからだ。手早くアトマイザーの蓋を取ると、テキー

ラボトルのような瓶のキャップを外す。

途端、ふわっとライムの爽やかな香りが溢れた。

思わず、大きく深呼吸をしてしまう。

サンタフュはスプレー・タイプじゃ無いのが難点だけど、じめじめした時にはもつてこい

の爽やかな香りが特徴だ。手早くアトマイザーに移し替えて、シッシュと一噴き。

足首と、今日はミニスカートだから膝の裏と、後はブラウスをちょっと持ち上げて、胸元にも、シッシュ。

「ん、完璧」

香水をつけるだけで、全身が爽やかなヴェールに包まれていてるみたいな気がするから不思

議。

鏡に写る自分に、ちょっとだけ笑つてみせて、あたしは急いで家を出た。

7時45分の電車に乗る為に。

ホームの右側の階段を降りて3両目の後ろの扉側。あたしは毎朝、そこから乗るようにな

している。何故なら、そこには『彼』がいるから。

滑り込んできた電車に胸が高まる。今からラッシュに揉まれると

いうのに、あたしは電車

の窓に映つた自分の姿に身だしなみを整えてしまう。

吐き出される大量の人々と、かき分けるようにして乗り込んでいく大量の人々。その攻防

に紛れるようにして、あたしはいつもの車両に乗り込んだ。空いてる席を探すよりも、『彼』を捜してしま

う。

いつもの定位置。

開いた扉とは反対側の扉に寄りかかるようにして本を読んでいる。いつもの『彼』。

あたしは人波に流されるようにして、彼の側に、あくまで自然に流れていった。

いい香り。

彼の側に来ると、柔らかく甘い香りがする。

なんだっけ？

少し考えて、思い出した。バナナリパブリックのM。爽やかな柑橘系フルーツの、すつきりとした甘い香り。

うーん。

思わず大きく香りを吸い込んでしまつ。湿っぽい今日のよ

うな天気の日に、この香りを選

ぶなんて、……素敵だわ。

しばらく田を閉じて香りを楽しむ。自然に頬が緩んでくるのを感じる。

いけないいけない。端から見たら、これじゃ変な人だわ。
努めて何気ない顔して窓の外を眺めたりして。

でも、彼はそんなあたしのことなんかには全く気付かず、ただ本を読んでいる。

何の本かしら？

毎朝見る度に、彼はドアに寄りかかって本を読んでいるのだけれど、カバーが掛かっているので内容までは分からぬ。どんな本を読んでいるのか分かつたら、少しあは彼のことが分かる気がするのに……。

カバーの書店名は彼が降りる駅にある大型書店の物が大半で、彼がどこに住んでいるのかの決め手にはならない。少なくとも、あたしが乗る駅では無いし、多分ドア付近に立つていることから、始発駅でも無いとは思うんだけど。

毎朝、彼を見ているけれど、彼のことは何も知らない。何処に住んでいるかも、何歳なかも、何をしてる人なのかも。

彼のことを気にしだして、もづれくらいになるだろう。

初めは、この車両、いい香りがするつて思ったのよ。どこからだろうつて香りの元を探し

たんだわ。香水の香りつてことは分かったから、女人の人だと思ったのよね。優しい甘い香り

だつたから。その時は、何の香りか分からなかつたけど、後でデパートの香水売場で確かめ

たら、ダナキャランだつたのよ。それもレディース。

けど、突き止めた時は、彼だつた。

ちょっとビビックリしたけど、その日から、彼の「」が氣になつたのよ。

毎日毎日、彼の纏う香りは違つたわ。スーツを変える毎に、ネクタイが違つように、香りを変える。

ダナキヤランのメンズ。イッセイミヤケのロードウイッセイブルオム。ブルガリのプールオム。イブサンローランのライブジャズ。ヒューロボスのエレメンツアクア。バナナリパブリックのクラシック……。

どれも皆、柔らかい優しい香り。爽やかで、すつきりとして、仄かに香る。

彼の好みが知れるわね。

あたしはそれから毎日仕事帰りにはデパートの香水売場に行って、彼の香りを確かめるようになつたんだわ。そして、自然と自分も纏つようになつていつたの。

あたしの香水好きは、彼のせい。おかあさん」「こんなに買つて、あんたの体は一つでしょ。どこに着けるの」とか嫌みを言われるけど、つこい香りがつたら買つてしまつ。流

石に彼の着けている香りはメンズが多いので、あたしには似合わないから、同じ物を購入することは出来ないけど、それでも、彼もいつも香りを並べて楽しんでいるかもしれないと思つと、嬉しい。

さつと、彼は香水を沢山持つてゐるんだろうな。毎朝鏡の前で、今日はどうにしようかって選んでるに違ひないわ。……あたしのよう。

そう思つと、ドキドキする。

彼のことは何も知らないけど、読んでいる本を覗き込むことは出来ないけど、彼の纏う香りで、あたしは彼のことが少しだけ分かるの。

仄かに優しい、甘い香りの人。

窓の外を眺めるようにして、流れていく風景に映る彼の顔を覗き見る。

眉間に皺が寄っている。

どうして、そんなに真剣な顔して本を読んでいるのかしら？ いるわよね、漫画読んでも苦虫噛み潰したような顔してる人

つて。きっと彼もそん

なタイプよ。顔は悪くはないけれど、そんなに人目を引く程のいい男って訳じゃない。髪

型だつて、ムース付けて手ぐしで流しただけみたいな洗いざらしの髪だしさ。サラサラし

た前髪がメタルフレームの眼鏡に掛かっているのが、ちょっと鬱陶しいかな。きっと視力

は良くないわね。眼鏡取ると変な顔なのかも知れない。

でも……、自然な焦げ茶色した髪が、朝の光に溶けているのは、綺麗。

それは、彼の纏う柔らかな香りに惑わされているのかも知れないのだけど……。

だつて、彼には恋人だつているかもしれないし、もしかしたら結婚してるのかもしね

いし。結婚していたつて、指輪してない人つているものね。

でも、それでも、あたしは彼を見てしまう。側によつて、彼の香りを嗅いでしまう。

彼の纏う香りは、実は恋人の趣味で着けている香りなのかも知れないのだけど……。

それでも、仄かに香る彼の香りが、優しいから。

彼の纏う香水は、どれも仄かで、微かに甘い。彼のことは何も知

らないけど、でも、そ

れだけで、彼のことが分かる気がする。
柔らかくて、仄かに甘いんだろうな、彼……。

電車が次の駅に滑り込んだ。

アナウンスが流れると、彼は本から顔を上げる。電車がホームに停止するまでには、本はバックに仕舞われていて、彼は寄りかかっていたドアから身を起こしている。

あつと思う間もない。

ドアが開いた瞬間、彼はそのまま降りて行ってしまうのだ。

たつた一駅だけの時間の共有。

それはつかの間の7分間。

電車の窓から彼の姿を追う。彼は、当たり前だけど、振り返りもせずに、ジャケットのポケットからカードを取り出しながら改札を抜けていく。

ケツからカーデを取り出しながら改札を抜けていく。
いってらっしゃい。

あたしはその背中に心の中で声をかける。

それでおしまい。

あたしは新たに乗ってきた人達に彼のいた位置を取られないように、空いたスペースに身をねじ込んで、彼の真似してドアに寄りかかる。
そこには、彼の香りが残っているから。

甘い、良い香り。

何処に住んでいるどんな人なのかも知れないけれど、毎朝の、ほんの一瞬のすれ違いなの
だけど。それでも、彼の香りはここにある。

明日も、逢えるといいな。

パート2：彼女

「さてと、今日はどなたにするかな？」

髪を剃って顔を洗い終わると、洗面所の窓から外を見た。空は薄曇りだし、ちょっと湿気もあリそうだ。飯食つてゐる時に天

氣予報は何とか言つて

いかな。
たけと
忘れなさい。
たけと
この夕は夜は雨が降るんじやな

卷之三

「今ほんこねたな」

くらし残ってる。キャップを取りて、脳に向けてシニッピー¹途端、爽やかなグレープフルーツとオレンジの香りが流れた。思わず深呼吸してしまう。

い甘い香りに変わると
こちらも気分がいいから。

スーツだとそろそろ汗をかく季節になつてきだから、何処に着けうかと少し迷つて、

結局膝の裏と肘とに軽く着けた。

やはり男は仄かに齧るくらいか丁度良い。
……いや、それは女にも言えることだけだ。

髪を手ぐしで撫で付け、手早くシャツを着替えて、ネクタイを締める。

時計を見ると、もう出かけないとアウトだ。ジャケットを手にし
たまま、俺は慌てて玄
関を飛び出した。

7時24分の電車に乗る為に。

改札抜けて一番ホームの3両目の後ろの扉側。毎朝、俺はそこに立つ。座る席を探す労
力が惜しいからだ。それに、俺の降りる駅までは30分弱だ。大し
た距離じゃない。ドア

に寄りかかって本でも読んでもいたら、あつと言ひ間に着いちまう。

それに、立つていると、少しだけ、良いこともあるし……。

ふと、そんなことを思つたら、頭の中を『彼女』の顔が通り過ぎ
たので慌てた。

良いこと、なのかな？

それはよく分からぬけど、『彼女』は、今日もいるだろうか？
次の駅が近づいたことを知らせるアナウンスに、俺は読んでいた
本から顔を上げた。

俺の寄りかかっている扉とは反対側が開く為、『』つた返す電車の
中の人陰で、ホームに

立つてゐる人の顔までは見えない。

ホームに電車が滑り込む。電車が完全に停車し、圧搾空氣の音が
響いて、扉が開く。

微かに、緊張が走る一瞬だ。

勢い良く流れ出る人波。かき分けるように雪崩れ込む人波。そし
て、『彼女』がいた。

ほつとする。

何故だろう？

思わずほつとした自分に、ちょっと照れてしまつ。

彼女はどう見てもOしだ。毎日会社に行くのに、同じ電車に乗つ
てゐるのは当たり前の事

じゃないか。同じ時間、同じ電車、同じ方向。勿論、それは彼女だけではなく、きっと、この電車の中には毎朝俺と同じ体験をしている人がいる筈だ。てゆーか、大部分の人とは、俺は毎朝逢っている筈なんだ。

それなのに、今日も彼女がいると分かつたら、ほつとしてしまつ。そんな自分が恥ずかしくて、だいたい、彼女がいたからって、彼女は俺のことを何も知らないんだぜ。じつと見てたら変態みたいじゃないか俺は努めて何気ないふりをして、手にした本に没頭する。

と、すぐ側で、いい香りがした。

人波に押されて、彼女が俺の側にまで来ている。電車が揺れると、微かに袖が触れる距離。もしも今、電車が急ブレーキをかけたら、俺は彼女を抱き留めてやるのに……。

誰か、投身自殺でもしないだろうか？
ふとそんなことを考えてしまつ自分が疚しい。
心の中で少しだけ自嘲して、馬鹿な考えを追い出すように彼女の香りに集中する。

今日の香り。これ、なんだつけ？

ちょっと考えて、思い出した。ジャンヌアルテスのサンタフェだ。爽やかなライムの香り。

そうか、今日は薄曇りの蒸し暑い日だからな。こんな日に纏うには、いい香りだ。

彼女の選択の良さに、少しだけ頬が緩む。
いかんいかん。これじゃ端から見たら変態じゃねーか。
むずむずする唇を引き締めて、本を読むふりを続ける。
そう、俺は彼女が乗ってきた時から、本を読む暇が無いのだ。彼女のことが気になつて、

本に集中出来ないんだ。

いつからだろ？ 彼女の存在に気付いたのは。

俺は昔から香水が好きだった。特に柑橘系の爽やかな香りや、清々しい柔らかい香りが好きで、だから、そんな香りをされている人をみると、つい確かめてしまうんだ。

彼女は、いつの頃からか香水の香りをさせていた。初め、あれ、どこからかいい香りがするって思つたんだ。この車両は俺が今の会社に勤めだしてからずっと乗つっている。だから、彼女が後からこの車両に来たのは事実だと思つ。初めは気付かなかつた。それがここ最近、彼女の存在に気付いたんだ。

いい香りがしたから。

引っ越してきたとか、たまたま車両を変えただとかも考えられるが、彼女はこの春からこの電車に乗っているんじゃないかと思つ。若いし。大学卒業しちゃかりかなつてところで、二十歳前半かなつて勝手に推測しているんだが、どうだろ？ しばらく香水の香りをさせていなかつた（俺が気付かなかつた）ことから、ここ最近着け始めたと推測して、……彼氏でも出来たのかもしれない。

あ、……少し暗い考えになつてしまつた。

けど、彼氏がいようがどうじようが、彼女の纏う香は爽やかで優しくて、朝の鬱陶しい通勤ラッシュの一時を和ませるのは事実だ。

初め、何を着けていたんだっけ。俺が気付いた時、そう、エスカーダのリリーシック。ゆ

り、かな。花の香りが清々しくて、どこのどこのこんな香りをさせてるんだと思って、本

から顔を上げたら、彼女がいたんだ。すぐ側に。

小さくて可愛い女の子。二十歳は過ぎてゐるとは思つたけど、女性つて言うよりも、女の子つて感じがした。淡い色のスーツに柔らかな香りはよく似合つて、ああ、センスいいなあこの子つて思つたんだ。

それからだ、彼女のことを気にするようになつたのは。いつも同じ車両に乗り込んで来るし、多分こつちの扉が開く駅で降りるんだろうけど、俺の側にいつも立つてゐる。柔らかな、それでいて可愛らしさ香りを、仄かにさせながら。

そう、彼女の纏う香りは、柔らかくて優しくて、どれも少し可愛いんだ。

エリザベスアーテンのグリーンティ。ドルチエ&ガッパーナのライトブルー。ラウラビアジョッティのラウラ。ジャンヌアルテスのサン。ダナキャランのレディス……。

爽やかで、主張しそぎない香達。けして着け過ぎることなく、側にいると仄かに香る。

彼女の趣味の良さが分かるね。

勿論、それは彼氏の為にしていることなのかもしれないし、俺がこんなこと勝手に思つてるのがバレたら、どんな目で見られるか分かつたものじゃない。けど、……それでも。

何気なく窓の外に目をやるふりをして、流れで行く風景に映る彼女の顔を盗み見る。

サラサラの髪に、健康的な白い肌。淡い色の口紅に彩られた小さな唇は、少し厚めで、垂れ気味の眉は薄めで、黒目の多い大きな瞳は、ちょっと眠そつた。けして美人とは言えないけど、可愛い感じの子。

彼女はどんな人なんだろう。同じ車両に毎朝乗り合わせるだけの人。いつもいい香りをさせていて、きっと香水が好きなんだと思う。纏つ香は毎日服装に合わせて変えているから、
彼女は香水を沢山持っているんだろうな。毎朝鏡の前で、今日はどちらにしようかって選んでるに違いない。……俺みたいに。
そう思うと、ドキドキする。
彼女のことは何も知らないけど、彼女の纏つ香りで、俺は彼女のことが少しだけ分かる気がする。

仄かに優しい、甘い香りの可愛い人。

それは、彼女の纏つ柔らかな香りに惑わされているのかもしれないのだが……。

でも、それでも、俺は彼女が気になってしまつ。側に寄られると、彼女の香りを嗅いでしまう。

彼女の纏う香りは、どこの馬の骨かもしれない彼氏の為に着けている香りなのかも知れないけどな……。

それでも、仄かに香る彼女の香りは、優しいから。

柔らかくて、仄かに甘いんだろうな、彼女は……。

電車が次の駅に滑り込んだ。

夢から覚ますように、冷酷なるアナウンスが流れる。俺は本をバツクに仕舞い、寄りかか

つていたドアから身を起こしてドアに向かつて立つた。

彼女の乗つてくる駅から、俺の降りる駅までは、たつたの一駅。あつと思う間もない。

たつた一駅だけの時間の共有。つかの間の7分間。背を向けていても、彼女の香りを感じる。

離れるのが辛いぜ。毎朝毎朝、後ろ髪を引かれる思いでいっぱいだ。

けど、ドアは開く。無情にも。

俺は深く溜息を吐き出すと、気を引き締める。

行つてきます。

俺は心中で呟いた。

微睡むような良い香りの中から、容赦なく突き落とされるようにしてホームに降り立つと、

今度は改札を目指して進む波に乗つて、もはや意識の外の動きでジヤケットのポケットから

カードを取り出す。

背後で電車の扉が閉まる音がした。改札を抜ける頃には、電車は滑り出している。

そして、俺は一度だけ、彼女の姿を見る為に振り返る。

既に電車は走り出した後だ。彼女の姿はガラスに寄りかかった服の色でしか判別がつかない。

い。

けれど、それでも、つい振り返つてしまつ。

これが精一杯。

だつて、まだホームに電車がある内に振り返つたら、馬鹿みたいじゃないか？

彼女はどこまで行くのだろうか。

何処に住んでいる、どんな人なのかも知れないけれど、毎朝の、ほんの一瞬のすれ違いなのだけど。それでも、彼女の香りは、まだ覚えている。

明日も、逢えるといいな。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4954d/>

残り香

2010年10月9日06時05分発行